

P1-021

成人先天性心疾患患者の就労に関する質的研究－人生の長距離ランナーを目指して－

野澤 祥子¹、住吉 智子²¹新潟県立看護大学看護学部 看護学科²新潟大学大学院保健学研究科

【目的】

成人先天性心疾患患者数は増加傾向にあり、移行医療の整備、特に経済基盤を作る就労支援は重要な課題である。本研究では、成人先天性心疾患患者が、自分の疾患と向き合いながら、就職、就労継続を目指すプロセスを明らかにすることを目的とした。

【方法】

調査協力の同意が得られた20～30歳代の成人先天性心疾患患者9名を対象に、青年期の葛藤や周囲との関係性について半構成的面接を実施した。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行い、分析テーマは「成人先天性心疾患患者が就職し就労継続を目指すプロセス」とした。本研究は新潟大学大学院保健学研究科研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】

成人先天性心疾患患者が就職し就労継続を目指すプロセスとして、＜常態的にある心臓病＞、＜シビアな現実との対峙＞、＜自分の心臓への関心の高まり＞、＜自分の存在意義を見出す＞、＜わかり合える人との出会い＞、＜自分の身体を大事にする＞、＜長く働き続ける努力＞、＜いつかくる心機能悪化の予感＞の8つのカテゴリーが生成され、コアカテゴリー【人生の長距離ランナーを目指す生き方】が構成された。

【考察】

先天性心疾患患者は、就職活動を契機に＜シビアな現実との対峙＞を迎え、自らの疾患に対する理解不足を認識し、‘疾患について知りたい・学び直したい’と関心が高まることが明らかになった。早期からの疾患教育に加え、理解力と興味関心という条件が揃う就職活動時期における再教育が疾患理解への躍進となり、将来像を再構築する契機となることが示唆された。また、就職という環境変化により立場の揺らぎに直面するが、社会における居場所の確立や存在意義の実感が後押しとなり、就労を継続するためには＜自分の身体を大事にする＞ことが重要だとする認識に至っており、無理せず長く働き続けることを目指した価値観の変化は、就労継続を目指すうえで中心的で重要なプロセスであった。さらに、＜いつかくる心機能悪化の予感＞のカテゴリーでは、予後への不安だけではなく、心機能低下の予測によって事前に心づもりができ、体調変化に早期に対応できると前向きに捉えていることも明らかになった。近年はドロップアウトが大きな問題となっているが、適切な時期に適切な治療が受けられるように、心身のメンテナンスを生涯続けていくことが重要であり、医療分野での継続支援の必要性が見出された。